高野大師御墓

全五冊

へ13
1685
1

若林

へ13 1685 1

序

湯春の德我俤ゝ菊枝花姿て
開く神仙樂の日のもとゝきき
嫁淑の容ハ雪ゝ中乃梅白くふゝ
して色ゝしの熱ゝ廉ゝいてもく
見あゝ相生乃情まゝ婦結白髮の
尉と嫗ゝしぞ陰陽の姫ゝ子業ゝ

数を積て松の名もそなはの大海原
祝儀乃祝い物集くるくるの
契ぞ多けれ〳〵む〳〵

享保十八亥の
やぐ〳〵い神無

作者其磧
作者自笑

たうさぐ　しまぐ
唐船大島基

一之巻

目録

第一　山川万里を渡る法乃船の廊の徒
然なるまい人を始乃宝の恵賞
花おとい〳〵る久米い本乃粉ひ
ぐ〳〵ぢ男伊達廊いもと松あまと

第二　上根ふようして腰を押男侍是はたれ
たれの妻ぞいうるさるれ世の様
唐土はたれ古絵をらい又を思る吟也
親子の動面ふ彫るかどの恵性者

第三　長岡ふ北新もるるれ宗也君い新とや
樹木の法ら部い時恵恵の源るくすや
世ちのの泥む色男通ひ別る大く長
末代はあるいしもみなき肥ちの吸人

一　山川万里を渡る法名聖ぬ廓の住郷
人を恋の旅衣問もゆく末ぞ久しき拝見い九列肥後国海
種文れ神を友家とい我るり也我いまぐ宮まる妻もなまふ
よりそ人ふるるふ女もあるべかたく男様の始うれよび人屋
ふさしとき。酒のわりてうぐまんと。下の関上の宮也海の丸
山籠ちの柳町。恋人ふ世命に立ちたるへる色ふへ拝
紅ーナ日大日あそびうるふ。面ふ恋ちの姫いおまひくろ
はうふ見ひくく縁ふく。肌白うす角月あくるる世仕も
ちて恋ふうく紙とちばく。抑よ恋仕ど。三年よ紀あって
角ぐら。ねぐーる車ちずナ。白屋はこといるるぐ。男て色乃
のちぐさみよいあぐにぷくく新い世後。ふい堂の元の新ふ陽

る事はおしとげさびしさは。これの女には一見せぬやうなれば。みよきさつい
であれば。播州室の揚女町へも立寄一さかりして。それへのぼりさかもりなれば艀
衣乗せんかぐれ都路とげ立ひろ浦の泊ちらりと海上おもしろく舟つまぁ
られ。ねいの家来共と酒盛して角のよれる色男とにやの字の帆と
あげて西風よき立とふくまゝ遠江にもつまで揚屋室の色深よぎたと
つきけるが。室にて一夜はかりつ情とて見でる柳風呂に入てはしまの志けれし女
若あといふるは風俗古の田舎にて東の揺が仕出しにかゝる両国女は
さりあして世の云ひつく末内証ふよい所あれぞそもれにあひそめ
しより日和の出来にのずぐ口舌にかゝりをおもて。室はのつけ党そ
女郎あるかど仕切て日まされなぐさみ入ておそくば。錢は家の手代むかう。
よりもあいも押まかれ揚けまいば。法跡人へさびのうさけしに室の枝
女とふあそびして喧嘩を出しよりおゆふと傍の畳をのそば漆ようまでと

あまた世なるに。思ひもよらぬ無双の前代にも及ばぬ大さわぎ。ほどなく
ちがひ。ずいひに姉などゝ下宿ありて。かんなんする身なれば。西の揚屋の出来のものゝ
まゞ今日で志をとる身なりけり。おまわりの家来ならで。なぞくらの穀をすゝとつゞき。
今は無奉ともまけの女房けまいば。大坂を立のぎてそれ信路を急ぎける。
もとより金銀ある身なれば。友成の身神職とへいひなかつて大名に出入ぬね
万石あまりにつかへて。神代は猿田彦の後胤とかゝれたる系図とかや
婚姻祝儀おほせの夫婦相合の歌をうたひ。ぜうと姥の面則猿田彦の神体よ
て。日本に云なき三番叟は八代目にいまひ祝の能よりば。縁をうけて。三番の能を
やらす事。おそ種の家代々勧め。そば面を以て家督相続継目の
内をつとあれば。此種の地まで諸人崇敬する身なれば。鉢のまゝにかうね
太夫の根づ子をきゝより酒色に身をけるま。世の人口をとらでかりの跡をは
家の大崎方は色人あれども親られればしばせのかりの

上あがりてしゐはい三寸ばかりあるものの大さ五ぶ五人耳
目とおどろかるるばかりにつくしも色黒へぞめきに成る老たいわうこの深き
を才と肩待とそう陳ぐ此の男ぐそ系笑絵といふ人を
知て住る名ぬぐ中るのおろかとそてる孫の男ぐそいくら移り門
系とそ世男にこまつのとそいい惜ものの書房と目録にしより外にいる
く書写の天狗が通力自慢の異れさきとへゆめ義ろ神ろとは生
捕る船ふつけそうるわどの剣象りの数どいそあるこ無ろ刷りめよへ。
蛇腹関ゆ。書ひ寸義冥途の九八月九三ぶ郭どいふ所ぶ毎の御なき
後義九日ろれくすりつれぐちて家はの里のおろんなに為くとぞあきゆ
もきくて男あれべけそうて蓬へふんこみぐ嗜好と劇にすることて
ふてきるれぱかゆ和系といふ人たゆとおれどの去いぬはしべ賜を
さすつて恋の一字とゆてすれどのいて毎思べ。我くが感動しおそろくと

こひぐく力狩つのろ恋のさらぐにあて廓中りてあほ六門ふ人と毎て
入まりきとすれどきやつらが中るおろて武百人よりあれいばよあり
ぐくぱよいひいひて高夢ろ三人に石橋渡て無ろれくが中及へ色。
沙り紫の恋とろて恋きぐんよろうあぐれてすくるゆれおきるひろう。
他国の人いりる恋恋の繊細するりにすず橋紫朱てのまく橋紫とあ
さる太ふ三つけきて中る人かつをあげやくの門にとのぞきまろろう
そくのろうにぬきろけの紀屋るる一ーい色ふろ人てのる鶏るすぐくま
目とうどいれ蛇腹関ゆが見くとろみりを来ぐの鶏とそろすのたさふふ
してきろぬといと。俗橋ざろうひ色てと俗とでいるくゆ人ど。戸人ゆろ
の男た七八人てあまき。ぐそのたけのとずでにあぎりこぶとうれい。
毒生のつとくいされてい一名てぐぱやひるきさ仕合と芝居きいれ乃紙
りぬきおいて見れ出の男ぐたがひくとろつれべれれくとさまぎ

さら夫綱打を弟の種となさしおく拔打てをそかれば件の侍おめと
おけもいば柳風呂といふあげやの内へかけ入太刀を引つけて売りし籤る
無が廓中より男たち出あひ推を持出し籤帳へつけ入てくるかぎりに
させされバ以前のくいん緑の内に気がすくぶ一旦の悪人出すまじく其の侍
どひあげやれ郎け番で人とほしもちつまりてくうぴろうぶおぬへし始末せ。
あわもさりければお見せのさわり海かひけき如何かれいせまりをときさすが
以そておく何く働じゃれば役下の男ぞ其太郎の悪知てきてかひ皆
くみ物とさや、おさめ表へおられバ人気も数て所望せすものしさも
きづまりおるじ柳風呂の亭主がぎ猿の侍と最前へまづさき入念出の
内方ゆへ折ず外なうてきやつとの口論由を念よいわずが而の
まゝりの太刀の中るあれバ手ぬ物ざんまいそれハそちまち命をもおや
うし私ゑ持きやつとすゞあぶきるゑてゆるせやべしゆふしまふまゐ

縁をきりて金ぢ五百両をおくれバ親方の手前を主人をつかはれておやまくれ遣
毎てくれなと代りに三業をおろされ候すれバあたるこす物ぢます
と女房人の徒を笑ひにふいて首をまけとらひつけれバ侍おもがお出
業ともゆて揚より一封面するれも侍ぬかしなれ心ぞて亭主の物の殊
九州肥後の侍今宵は里へ来る一会くりの慰にあすが亭主
人の女房数へ申のあるよしにて御鉄炮とおさせられ其上に御衆中
あそびも見の中に夫婦の御客は北国方へ出るへ新造衆の御方の御役
もうにて口論の御座あれ共身なれの御寄ついてとやんでせまりつかけ
もなく御鉄炮をみ合ふれバ件の揚子を御相てせやさんべあひそうふ
事ありにまで当はへつくやいづや只の御慰させれてござる揚
屋とうわんてあれは申すりしもよろぬあぜれもの出あはば仕合なるに
済ものすべき今日ハ以も出かざんぷ伝侍の町人のあぶれ者にはを

つまり続する昭へいはじめとし詞をそ当家がやどれ招着代々て懸役
にすむゆうにおのを中さあれば亭主をんと儀さまわざまと奥へつげ報れ
肥後の国何種の御縁主成盛れの御家老にて源々せのうち聞ゆ
辰成盛云ころでは御入あそばしば世老未熟へ御用あされじ昭く
ることの御座敷をとりてきみえてきき仕合。御国をすくぶう尾よ
めそいは我々とても御くまでのめすくわんれ老元の西のぐうわがく
私が命にかけても将ねげをつまりさせい仕るほじ先おお方へ御素
内やさんでてきへ御入あなじといへでこれかくさいのまいの家へつけてこ。
さひもよらず名は前に御兵ゆるそられざれと亭主を先に立て。
成盛の内そあまふ方々へこそいおまゆり
㊁
上根ふよりて縁と押男倅なきの当部
諸の山寺く貴の海ぶく浮気の風よ吹さるる柳風呂の方々い

小判の光りと家の徳と宝いはしるれ渋らず月夜の釜ある安らふ行ども
並ようつるるぞ太臣の御きりんとれぐるれども友成云いくつの具てくはよ
いてきらいつもをたてねがふふて身ぬうられあ丁两へおじ件の仕を待
ひお方々へ出れば友成肝をつぶされ勤熟へたてつ正まそるすずやつ信
として此の身へは来けるぞとふりんあれば西書所り仕よくて来ひと
いうつあきか御祝君は西よ御深宿みそ茶立の薬ときいあれ
宝住の奥安楽上いふるをあさるる昭歓度の御尊にて人へ掛る願ひへ
のうつへ深出の此清幸みて家の旅瀬町く宝住へ鉢越ぶ今住の
昭てとえやせずく追揚いあるとととのさつかの昭てゆ
角出にまされば勘蔵の御宝付おお勢ある川大炊が憚源義
と某ある人へ仕付れ今使出蔵住よ名勘の相果て私源義ヶ
ゆ角兵衛とぞしば家へ何ぞ仕のかて追うくそゆ名すればゆく源蔵

議くるしかれと体をめされ候て、ひそかに[illegible]ともなされて[illegible]
ハ、此御家中より御用役来りてさきへ、一まづ肥前の御家に松浦
の何某殿方へ御内意を遣されしが、扨て大殿様もきこえ候への事と申合。
私儀ハ申上候へば、早速御心もと思召して、此御縁の御むすび
下されて、此度御[illegible]とね、御用捨を候て世に立つべし。
今もって役に立ざる事[illegible]中さへ[illegible]と[illegible]
此国にいてもおちぶれる事にならせて、御ふるさとへかへりたく。
[illegible]の所に[illegible]人まじくも[illegible]及ぶ[illegible]を
此事と申しきれなくと存じて[illegible]けれバ、此方にて友方よりハ此
御縁[illegible]に[illegible]の[illegible]せり。[illegible]御懇志よく。
そのまゝいよいよも此[illegible]し事なれバ、此御縁を[illegible]れ
いかにてより[illegible]の[illegible]よ[illegible]にめでたくあれかし

御侍の人々にもすぐれし者を仰せ出されしが、周囲[illegible]を御旗[illegible]され、
それにハ[illegible]されし、[illegible]より聞えて[illegible]、名にし[illegible]
[illegible]の情の限りすれバやがて今にハおもしろかずて[illegible]と。
[illegible]ひかれしバ、[illegible]夢[illegible]友[illegible]て[illegible]
又いかにされ[illegible]付[illegible]やつりやうて[illegible]と[illegible]
西[illegible]友[illegible]の御縁[illegible]と申合て、日比の願ひ[illegible]との[illegible]一[illegible]にて
も[illegible]て御[illegible]て[illegible]れバやがて親の縁[illegible]と[illegible]の
[illegible]の[illegible]禁[illegible]にても[illegible]御[illegible]
[illegible]人々にても[illegible]を[illegible]れ[illegible]て[illegible]けれバ、何某
が[illegible]と申て、年来の[illegible]せしといひしを[illegible]の[illegible]と
あざけるハ、自余の[illegible]ハさもあるべし。[illegible]を[illegible]の
[illegible]を[illegible]しもつておつくれし仁義の友[illegible]と[illegible]てられんも[illegible]よ

又ぐれうのもとの一ぞいきつくるに、ぞくしめていふるに、孫九郎安もうるふ
系とふ仏者と又ぐるが仏者をあがるゆへ、ぞくをおのそいつてきうすじ物語
するゆへ、すべて男女ちがひ、ふびんと次へ長じ、ぞくを勝ち人と捨ひ、学ぶ側へ
振ふ。抑この座中奥の大わ友ちとすいぶんみよい祝ふ家和合をなるべき男
子ぞく物ぞ姫ぞ中ぞ妻ぞ一ぞ、ぞくをいつぞ、おぐるゆへ祝ふ友ちる云姫才孫ぞ式
ぞくをいつぞ方といふる人ぞ、ぞくの嫁ぞ又ぞの合わて指ぞれと一おのゆしびて
家方と友ちと張ぞ。入孫ぞ、むく物ぞ姫ぞまぬこのもひる和ぞ、ぞくぞ
ぞくぞ姫ぞ物ぞ姫ぞゆづて果ぞ友方絶間の系間として和ぞのぞ恵在
系の中絶ぞまぬく始ぞ結ぞ絶縁の仏ぞ云ぞれぞ云後ぞくらべられしぞ。
祝ぞ情脇ぞ月ぞうう。友ぞの男子ぞまぞけ友ぞ和ぞと名付ぞる。
仏宛ぞ和ぞぎうぞぞ仏ぞ西ぞの云ぞ国へもつれてぞうぞ云ぞれぞもえ系
友方ぞふ男ぞる人ぞ門ぞる仏ぞ方ぞもぞこぞれぞ和ぞをつぞぞとぞ人ぞゆづうぞ

時物ぞ姫ぞ友ぞ和ぞ大ぞ男ぞとぞうれぞ友方ぞ西ぞの和ぞ妻ぞ妻ぞ
と妻ぞ西ぞうぞ、ぞくぞ帰ぞ来ぞて友ぞうぞを西ぞよびぞうぞと。和ぞぞ
ぞ和ぞうぞ。ぞ妻ぞ和ぞ妻ぞ物ぞ姫ぞ情姫ぞ。ぞ和ぞうぞ和ぞと友ぞ一ぞ
行ぞ和ぞ清ぞうぞ。ぞれぞ和ぞぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。
万ぞ家ぞとぞ見ぞゆぞ和ぞ和ぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。
ぞ見ぞて和ぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。
ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。
ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。
ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。
ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。
ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。ぞ和ぞぞ和ぞぞ。

甲斐に年月を送りしが父の遺産を守り。兎角おぼつかなやせぬと汝母
よりの家督を父とし上にて、つぐき者は汝と弟ありて心中に承知し、猶子の事
然も我が家に在るにつげず、弟兄上に家をゆづり給ふと思ひれば。
我が身を如くにこそ世の人口にも移る。なをゆすべき勤番あらんは汝に定め
たる時は兄上をひかえ。我らは若輩にされても父の罪といへども我聞召し
きゆへおもふ所やをつかざる事なし。某は主君に従ひて卿をも
兄にも私なりとはいよいよ同じと。是とく御家の名をいたずら悪所へ
身ぐるみ抱く淫行する汝をあらせ。母より申さるを受くる今は是をた
いまとる我が仕置と制せんとすれど。その先を見かねて君には勘気を蒙り
などおまつさへ去年より嫡孫中納言殿の息女を殿にて御とも
妻合せ家督を譲し、隠居なさるべきとの書の趣はの御意の趣此門よ。
一旦への布衣に昇進すべし。一計を以て着べし。兄の身は容をぞ大かたは御家の

乃至父を拵てかた見なる家督一たびの断人にも不孝と種々やさで
の御前と落着して、ろし状御召しておよそ千金いくれにたまわるを
孝なれ。昔漢の文帝后の故にて宗室に返ししか。兄に恐れをもて
まで廃したるは姉にのゆづりを書し民さぞて一人の布をもぬへしと。
うらへてさわぎける結構なる大小の刀に脇差大小を以て兄分に捨てく
ふを用ひて兄に拵て身の構を用ふる所へ参られる仕度に蔵
七落着兄ろ我が親目を継ぐそ主君の死におくれて邪なる
思はれてひとつ悪名を付くる方において不孝の身一世の人に
ろゆびを指さして、ぬすまれずしてなん所に身をおそし中納言を頼むゆへ
此と拂はれ兄上は家督をつがせなん孝子の名ぞ今宵より
我にまた伯方へもふ返れかしとは倫て出家と父とひやに流浪
して博す兄弟の不便をむくくまで家督をゆづりなるひぐれく悪徳の家

御先祖の石に向ひ。念願太義をとげさせ給へと。今はおそろしき事もなしとぞへきぞと。
頼と共に金座打ぬけてかへらんと孝子の行をぞいひける

㊂ 呉国の郭巨も又かくの如き君ハかんがへや
縁より性ハ若たり。悪党共のたくらみ孫々に内意雷月よりあげやの座に行
また親の孫の侍が指をとらかびひかりけるが。友成の今れ我経をとゞめて。
今の代にハためしなき孝子つゝ人きく者の献上の次男重耳にもおとらね
義といひ孝といひ類なき友成と。男伊達の角を折たる樹木の中に
あくれて感じあへりける。正直次郎を召て。先一通りハ立根いたしけるがその
義をまハりぬひ。此度於一見の先に立て御銀を出されけるに。此家の亭主
元来の尉殿の面をおそれおもハじい。全く兄弟に御家相続をもやされしは
きはめて二人の窃盗より此その不分なし。御相手の様に経ハ御ゆと
御公ハ相違なき亭主の面をすてハ継目の三代けがれとよく家督
を除すとあらバ身均わきまへよき事ハせんとの巧みその悪人ばらばんは
正直ハ徳服行べきと。一番の事を返されバ。友成大きにおどろき給ひ。彼
家の亭主の面をば其まゝおかれしに何者かいひけるぞゆかしかりけ
見るき事。御座大名衆の御身をとりかへて。正直の亡母の地ごくへおと
すべきもあれば。急々世上の不審をはらすべしとおそろしき誓を立ての事なれバ。
正直始て肝をつぶし。只今の御誓言の上にてハ。よしやうわさハ佛ハまへ
佛ハ。御いはゞ此度の儀の御上意をさへのはゞ。御家まで望をうけ
給ひて。此兄弟ハ我をねたみ。御身ハ我をつけ上をすゝめられて。
親族へさへ残らず讒言して。御勘当にあふべきをもや。振捨て其
僕をめて掛者かの眉毛をよみ。御勘気の御使と号す。其を
来るべき事とて。今此君をれハ君その御難に
御天性とえきなく。門に落去を法師無返数の

れんどうの
ナ条ちを
よろこばすもの
ようハ
あんを
うむぞ

けうとくそをいはの兄公友成の下おそれをぼーが奏の
ものも為
さの仕ようもこうやはあの内かするぬのいはまろぼうしいはのの
遠公おあるるれいぼの和さそえにの色ちさ体をはあそびはたさ
べ和泉義りの花表向より仕うけ。親殿は勅気をアはかぼ。そ府
はおどろきおされ体をぼ津をは勇すう遠あひひそふ兵に入れ
宅へは入るさ見ぼ和方に為玉をうはいうひいは楽を遠長れ
和ぼ兵人く奏のりを金紙仕出いで。遠長楽にれを体へちん。
さあるはいはあのたりの事も和泉牙にでかりあぐは勇をはりさる
べといひられいあ為をと見上にを為さんとは人遠長あがるに入を。
他人は為とうはれんや。奏の出るをいうもあくも。為が指為はまりすぼ
とみられい。四去い伝び指為へひそふはりろ。友成い奏先ーと
いりりをは人あひてりられ和為。為から気とはりれまぼれぼざと

そもそもの初めにて猪はへのけ[illegible]つぐの中都木枝実をとぶお在
波へはされ改めて為為とびはられるぼへ在の樹木の陰ぼいる和
門をのつくくおかまへて在中さいぐまへ厩おもはさるされまぼ。
秋るれ[illegible]里の厄病の祈同祭は。廊中の男女の老い婦いる男修を。
人いん和とやぼぼぐおまりには為ぼ登げはりさふはかりもるき。報
糸の服は云先下さぼと母をの在しる為へとをれぼはかれ
富仏仏刀はとうけ。為所人の在為へ報来ー。我まとけるるい
ちぼぼべ山松真の山松るるに為はをはるすにるぼ。
切て切をんと和ちるを拝ぼ。友成を見里の墓門のるを石つを
られ。大海風ちをいは右報拝。仏仏を拝をるは。おの石いび廊人毎
板来てさいるるおの男修きの松人見い山在為の奥にもるれで。
そのまるおちるされぼ仏はあるを。れて人見ぼるぬるぼんは右一百人金も

これハこれハひよこなりてハ弟一ばんのおなごが出るとくつろくといふて
さしづめにも其ハのこる儀にて剣菱清子にうつるをみて
菊がかゝる梅暮のらちをそむけせて床中の火を付あまどをあけそのむかふへ
ゑゑり源氏剣熊取次にて仕込つき案内して西役者へ通る。
女房に対面して親房は役者によつて伊勢海縁類の首下り弟子を横へ。
花野なりき御役者を上にむかひ武士の風料理にもつきしゆつになると。
女役をとりあつかへれバ女城神で敬してしておどろきたる風情。
其のけいをわれて剣の弟子をおもんみて何やひくべきやも
しばらくおぼせる今更悔てみつずしまいは女役の人々を頼み入。
親房の御きげんとり合。勢の殺の沙汰もなし相ちの弟子
のかなしい。姿の家来なる娘の顔をねすみ出すとは女役へと言葉お渡せと
れ御手付てそのみこまつ。しかし顔のふるまひおいてハ喜んで笑ひは殊にて

御金銀（せんぎ）を願（ねがひ）する所をそれにあれば源氏屋をひそかに頼ば上面（おもて）の
様ハしらずそれハ御鉄が御座なきまゝ。招く合点（がてん）の御ゆゑなりかな。これ
而者役ばらぬ貴方も御様の座り御願と聞き出奥をわるくみて。
なきに極（ごくハま）つたる次へ自余（じよ）の者の御気へ入るハけりにハ性ニあ房の
御うへニ見べきもの御かたニおいて御金銀（せんぎ）一決してしまいの弟一の御さかひ。
後々に更ニ御ねなきとみてハあ房の所ニ御出で御座へ出入の盗
みしハや、苦々（くるしまつて）心家の座りかりそめすくつて太切（たいせつ）なかれバ直にさき
にてあるねとがうつ縁られは御ゆへせしハ女房て親ゑくた大名根へ
やようしもつと御ねなきくや、性のあ房の御かたをいうてき。殊に
女房とを金銀（せんぎ）住みへたゆかく御ねなき所御たるにゆへ縁ハ心
より御気の御もちなるを吟味（ぎんみ）もなるべしとや。女がものなるが。
思ひハいかが思案しそと剣熊（おくま）が方をみて中けれどあやぶうかづらう。

はるかに手をはなさず。所家記録の内に長行をそ。初代の内をたく
はるかにうろ辰へ中上げそ。はたはたはるかにうたせ。はるかにうたせ
あれば。若しはたはるかにうたの称又と。称くだし。はるかにうたせ。みだくのん
といひくれば。そうはるかにあ程称又をて流もどと。破れよせ称又
に無利して流さるれば。手すて流さるれば。はんかの内さだんの
みさうはさいをもへはたはもびうさるどぼ内の流まるべ。称くあ人が
方へうるずはたはもあくは越ど。先高なれ月由に。あるどと。
釈大脳が公つけ。れへひそうふおが流ゆくんさみ第れよせ四より全
子二面あおく。成公へはれば。縁よしは長のもざ。二人程ちつをり
と伴の今をとあの様へ入れ。つよくあ人ひとあるが形もせずいぶん
咽喉にてはそとつとあ。釈長のうとそちらに形ひ。長長かとそ
へてはうへづくかれるきよと流とたに方長とうせあへ。程おい由

猿刀ととけ自害せんとすると。一たの安ちを元結ひ。引長にて。弱へ
いうとをもつにあり。とれおとは方安ちを。釈方のとへむ。引長なる
こそせひうれあ。流なく大へは。長ちんとうあ。長ちをあげやのうを呼
あ。安ちなひ長は遠安の内は新月の中様食佐ぎい。学ちて長今。絶
らどあ人つちにとうへばる。流くれをるの内方分上。絶ちう。一絶も流へ
なくいはあのくうと長ちと絶なにあすが絶ちの中と。流ひむこそちりしそれあ
役は長成公の称へとれれて九列へ長ちうりや長成ちい伴の今をあ
の袖に入れいづこ先ちめおくすぐくと出れるふうん様へ内ちいはおより
今ちに入へがうれよはそだとそるれど。一ちもいるず。絶に。ついて流は久せ
あふあちはうれて伴は住ることそ。さすがいちにといるく方れなどみそ。
ふあのくりけう住くちり

一之巻終